

## 2015 外務省招聘による元オーストラリア兵捕虜・家族の来日

2015年11月9～16日、日本政府の招聘で、元オーストラリア兵捕虜3人と付添家族4人、計7人が来日しました。10月から12月にかけてアメリカ、オーストラリア、カナダから計4グループも来日したため、準備に割く時間が限られ、いつも交流会の会場にしていた麻布台セミナーハウスも確保できませんでしたが、戦後補償ネットワークの有光健さんのご尽力で、参議院議員会館内の会議室を使わせてもらえることになりました。元捕虜の方々は捕虜時代のつらい思い出や日本人への恨みつらみはあまり語らず、前向きな発言が目立ちました。全員90歳代半ばのご高齢ながら、充実した日程を元気にこなし、無事に帰国されました。

### <来日された元捕虜の方々の略歴>

1. キース・ファウラー氏(Mr. Keith John Fowler)94歳 南オーストラリア在住  
シンガポールで捕虜となり、チャンギ収容所を経て泰緬鉄道に送られ、カンニューやヒントクなどで労働。病氣となりターサオの療養所で療養した後、タイ～ビルマ(現ミャンマー)国境の三仏塔峠で終戦を迎える。  
付添人:ジョン・ロバート・ウィッター氏(Mr. John Robert Whitters) 息子
2. ジョン・ギルモア氏(Mr. John Barry Gilmour)96歳 西オーストラリア州在住  
シンガポールで捕虜となり、チャンギ収容所時代に栄養失調のため視力を失う。1943年6月、神戸の第2分所に移送され、神戸周辺の港や貨物駅、倉庫、製油工場、電極工場などで労働。戦後は、長距離ランナーとして活躍し、日本のマラソン大会やロードレースにも参加。  
付添人:ジュディス・キャメロン氏(Ms. Judith Cameron) 娘  
ジュリー・コットレル氏(Ms. Julie Cottrell) 友人/看護師
3. ジャック・トーマス氏(Mr. Jack Renton Thomas)95歳 南オーストラリア州在住  
ジャワで捕虜となり、シンガポールのチャンギ収容所を経て泰緬鉄道で過酷な労働に従事。1944年、山口県山陽小野田市の広島第9分所に移送され、大浜炭鉱で労働。のちに画家&作家となるレイ・パーキンとは捕虜仲間。  
付添人:グレーム・トーマス氏(Mr. Graeme Thomas) 息子

### <主な日程>

- 11月 9日(月) 成田着【東京泊】  
10日(火) 外務大臣表敬、他 【東京泊】  
11日(水) 横浜英連邦戦死者墓地訪問、他 【東京泊】  
12日(木) 市民交流会、他 【東京泊】  
13日(金) 地方旅行(神戸市、山陽小野田市)【地方泊】  
14日(土) 地方旅行→京都【京都泊】  
15日(日) 京都【京都泊】  
16日(月) 関空発

## <板橋区の幼稚園訪問 11月12日(木)>

参議院議員会館で行われた市民交流会の前に、元豪捕虜の皆さんは東京都板橋区にある「緑ヶ丘幼稚園」を訪問した。そこでの園児たちとの交流がとても嬉しかったらしく、随所でその話をしてくれた。



P研からは誰も同行しなかったので同行した看護師の伊藤幸子さんが、幼稚園と外務省の許可を得て、写真と動画を送って下さった。



(村田則子)

## <市民交流会>

日時：2015年11月12日(木)14:00~16:30 / 会場：参議院議員会館1F 特別室

司会：小宮まゆみ&田村佳子 / 通訳：山田紀子



(通訳ブースもある国際会議用の部屋で、各テーブルにマイクが備えられ、音響も抜群。参加者70人以上)

### 1. 参議院議員 藤田幸久氏の挨拶

遠いオーストラリアからようこそ。オーストラリアは私にとっても妻と出会った思い出の地。

日豪は相互補完的な役割がある。お互いに持っていないものを分かちあう大切な関係。今日お越しの皆さまは94歳以上の方々、戦時中はシンガポールや(タイ)、インドネシアで苦勞され、その後日本の企業で大変厳しい状況の中で働かされたにもかかわらず、今回来日されたことに心からお礼申し上げます。今日の会合はPOW研究会が時間もお金も自ら割いて努力して開催した集会。それを外務省が信用されてのプログラム。どうぞこの数日間を有意義にお過ごしください。

## 2. 元捕虜の方々のお話

### キース・ファウラー氏



このような会に参加できること、POW(Research Network) Japan の皆様に感謝。この会は日本で平和のために活動しているとのこと、前進あるのみです。午前中日本の幼稚園を見てきたが、知的で素晴らしい子供たちだった。このような子供たちが日本の明るい未来を創ってくれるということを確認した。私は過去については長々と語ろうと思っていない。過去は過去、未来について語ることを多くしたい。現在豪日はビジネス、友好など様々な面で深い関係を築いている。

ここでは戦後、オーストラリアに帰国してからのことを簡単に話す。3年間日本で捕虜として暮らしたことで病んだ精神や肉体を治療するため入院した。そして家に戻って3、4か月後に結婚した。結婚をしてからも3年間、日本での捕虜生活から通算して7年間の間、捕虜であった体験が自分に重くのしかかり、苦しい生活を送った。怒り・憎しみ・妬みといった感情が常にあり、それが自分の生活に強く影響していた。それでまた精神を治療するために入院したりした。まさにこの3つの感情、怒り・憎しみ・妬みといった感情は世界を破壊する感情だと思う。現在でもそういう感情が世界に渦巻いているのを残念だと思っている。こうした妬みや憎しみという感情が自分自身を壊していくものだと気づいた時、それではいけないと思い、自分の人生や家族を振り返り、立て直していった。それからは極めて良い人生を送ることができ、現在では7人の孫、2人のひ孫にも恵まれ、素晴らしい家庭に恵まれていることに感謝している。現在、振り返って思うに、戦争体験があったからこそ現在の自分があるのだと考え、日本にも感謝すべきかなと思っている。小さな考え方もかもしれないが、その考え方で行けば世の中を良い方向に変えて行けると確信している。現在の子どもたちが大人になった時、もっと素晴らしい世の中になっているように、世の中を良い方向に変えていきたい。今回会った皆さま、様々な形で努力されていることに感謝。現在の私はハッピーな人生を送らせてもらっている。愛と友情に満ち溢れた世界、現在の世の中では足りないが、そういった世界になってくれればと思っている。

### ジョン・ギルモア氏



私はシンガポールのチャンギ収容所で過ごした14か月の間に、劣悪な環境の中で視力を失ったが、帰国後、友人や周囲の方々のケアのおかげで少しは回復し、車に乗れるようになるまでになった。しかし、顔の識別ができないときもあり、友人たちの中には戸惑いがあったかと思う。

シンガポールから船に乗って北上し、捕虜の交換かと思ったら、着いた先が神戸だった。そこで日本の会社、建物の中で労働することになるのだが、日本人と同じ制服を着せられた。自分は幸い身長が低く、サイズが合ったが、180cm位身長のあった人には制服はきつかった。高浜埠頭・三井倉庫・昭和電極などで働き、ハードな生活を送った。特に冬場は厳しい環境で雪の中で濡れながら仕事をした。一着しかない服が濡れ、翌日もその濡れたままの服で働くということで、肺炎になってしまった人たちもいた。やがて病気になり、注射2本必要と言われたが1本になり、着替えもできるようになり、病気は治った。

戦後、捕虜から解放されてオーストラリアに帰国して、再び日本の地を踏んだのは1982年。私は長距離選手をしており、その時はマラソンと河口湖周辺を走る10kmのロードレースに出場し、優勝した。そして3度目の来日が1993年、宮崎県で開催された世界ベテランズ陸上大会だったが、10kmクロスカントリーと10kmトラック競

技で優勝することができた。(註:ギルモア氏は、戦前はサッカー選手及び長距離選手として活躍していた。戦後も視覚障害を乗り越え、マスターズなどで世界記録を作った高名な長距離ランナーである) 1982年に戦後初めて来日した時、一番驚いたのは日本の女性が洋服を着てヨーロッパスタイルになっていたこと。昔の日本の女性は着物を着ていたので、とても驚いたことを今でも覚えている。

今回このような招待を受け、このチャンスを逃すまいと飛びつき、娘にも相談したところ、いいじゃないかと言ってくれ、素晴らしい機会に恵まれて来日した。戦争以降 3 回の来日で接した日本の方々は素晴らしい方ばかりで、このままであり続けていたきたいなと思っている。今回のスケジュールでは昔、戦争捕虜として働いていた場所、昭和電極などを訪問ということだが、当時の思い出として、一番大変な場所で一生懸命働くとはめられて、次にまた働くと、たばこを 20 箱ぐらいもらい、そして、少し楽な仕事、船舶や荷卸しなどの楽な仕事に回されたのが思い出される。

### ジャック・トーマス氏



私の捕虜体験を今日この場で話せることをうれしく思う。兵士として 5 年間オーストラリア陸軍に従軍した。オーストラリアは当時世界を相手に戦っていたので、まず中東に派遣され、そこでドイツやイタリアと戦った。その時もドイツ人やイタリア人の捕虜を見てきたわけだが、当時は(捕虜を)見下していたように思う。その時はまだ、日本と戦っておらず、日本は敵ではなかった。ところが 6 か月後、(日本と戦って負け)、自分が日本の捕虜になってしまった。そして大変な屈辱を味わった。殴られ、プライドを傷つけられ、これほど心の痛むことはなかった。2年半の間、労働使役させられることになったが、これは決していいことではなかった。日本では広島と長崎の間にある大浜炭鉱というところで働いた。戦争が終わると、沖縄からマニラへ行き、そこで日本兵が捕虜になっているのを見たが、彼らが何を考えているのかということは体験上わかった。

戦争体験を通してわかったことは一つ、戦争には勝者はいないということ。私も自分が勝者だとは思っていない。自分は捕虜の時の気分や気持ちがわかる。私はビルマとタイの間にある泰緬鉄道で働き、やがてシンガポールから船で 10 週間、約 70 日間の過酷な船旅を経て、大浜の炭鉱で働くことになった。戦争を経験して言えることだが、戦争は敵を作るだけでなく友情も育むということが分かった。当時の戦友とはいまでも友人関係が続いているし、タイにいたときの捕虜 4 人が今でも生存しているし、ここに二人の戦友と来られたことに本当に感謝している。こういう捕虜を招くという事業があるということは今まで知らず、自分が来ることになるとは思ってもみなかった。今回来てみてとても意義のあることだと思った。来日して今日で 4 日目、東京しか見ていないが日本の文化は素晴らしい。明日、自分が労働した大浜へ行くが、いい経験になると思っている。

### 3. 同行家族の方々のお話

#### ジョン・ロバート・ウイッター氏(キース・ファウラー氏の義理の息子)



私はキース・ファウラーの義理の息子で、私の妻が彼の娘だが、妻が来られない事情があり、代理として参加した。柔軟なこのプログラムに感謝する。父を含めここにいるお三方、また全ての捕虜の方々がどのように苦しんできたかということは十分にわかっているの、私の方からこれ以上語ることはない。このお三方はその多大な苦しみを受け入れて、それを体験として生きてこられたことに対して、大変尊敬している。彼ら 3 人は

捕虜としてオーストラリアにとって素晴らしい大使として活躍されていると思う。日本の外務省、POW 研究会にこのような場を設けていただけたこと、その実現に努力されていることに感謝している。これで両国の関係が強固になっていくことを願っている。

#### ジュディス・キャメロンさん(ジョン・ギルモア氏の娘)



このような旅を計画してくださったことに感謝。父をどう見てきたかということについて話す。彼が戦時中の視力の低下により車が運転できなくなり困った姿も見て来たとし、そのことで大変苦労してきた。彼にとって視力を失ったことは大変な苦痛であり、それを聞くと、目に涙ということになるのであまり語らないでおく。父は視力を失ったことでほかの捕虜体験者の人生と違い、まわりの人に頼らざるをえない生活になった。長距離ランナーとして走っていても、前の障害物が見えないのでぶつかったり、例えば銀行の通帳が見えないので、母が同行し、虫眼鏡を使って数字を読んであげたりして、母が手取り足取り世話をしていた。しかし、母が病気になると、サポートできなくなり、父は初めて自力で何でもしなければならなくなった。若い人には理解しにくい経験かもしれないが、私をはじめ周囲の人の助けを借りる制約のある生活をするようになった。しかし、毅然とした人なので私たちには心配するなどと言うような素晴らしい人だ。今では孫もひ孫もできて、素晴らしい祖父であり、父である。父はこのような大変な体験をしたが、彼だけでなく、私の叔父も同様な体験をしており、過去のことをこれ以上語ることはない。今回、日本に来てから素晴らしい経験をしており、大変感謝している。ありがとう。

#### ジュリー・コトレルさん (ジョン・ギルモア氏の友人／看護師)



私は彼の友人であり、看護師をしている。彼の誘いを受け、素晴らしい日本文化を体験するプログラムに参加することができた。先ほどからジョンの話があったが、彼はこうした障害にもめげず、すごくハッピーな家族生活を送っている。彼は長距離ランニングに情熱を傾けており、今まで打ち込めたことでこうした障害を乗り越えられてきたのではないかと思う。彼はほぼ視力を失いつつあったが、それにも関わらず、立ち止まることなく、その状況を受け入れることに努力し、前進、前進で前に向かう姿勢には尊敬の念を覚える。今回、お互いにこのような来日の機会を与えてもらい感謝。またこのプログラムに参加することで、お会いすることもなかった他の素晴らしいお二方に会えて嬉しい。

#### グレアム・トーマス氏 (ジャック・トーマス氏の息子)



父は帰国後、ウオークンヒルという都会から離れたところに住んだ。都会に戻った方は英雄扱いされたかもしれないが、片田舎では捕虜の友人たちもいなくて、そこでは捕虜であったということはあえて触れず、家の中でもタブー視するようなどころがあり、私はそういう環境で育った。戦争について父から話を聞いたこともなかった。父がアンザックデーという軍事パレードの日に行進している姿を見て戦争に行ったんだなと実感した。父の姿勢から学んだことだが、私は日本について敵対心や恨みを持つこともなく、穏やかに育った。今回、日本を訪問することができ、素晴らしい方々とお会いし、素晴らしい歓迎を受け、日本という国の素晴らしさを再確認することができた。歓迎に感謝。

\*\*\*\*\*

★会場にはギルモアさんが収容された神戸の大阪第2分所の労働場所の写真や、9月に長崎市郊外の福岡第2分所跡に建立された追悼碑の写真などが展示された。

★休憩時間中に、玉山和夫さん(歴史研究家)が泰緬鉄道に関するご自分の著書「Building the Burma-Thailand railway 1942-43」を三人の元捕虜の方々にプレゼントされた。

\*\*\*\*\*

#### 4. 質疑応答 (あらかじめ質問用紙を配布、休み時間に回収して質問)

Q1:ギルモアさんへ。

① 私は少年のころ神戸の兵庫駅の資材置き場で捕虜を使役していたのを目撃したことがある。ギルモアさんはそこにいたか。また丸山町の捕虜収容所(註:神戸分所は1942年、中央区にあるオリエンタルホテルの倉庫に開設されたが45年6月5日の空襲で焼失。丸山町の神戸川崎分所跡地へ一時移動した後、脇浜分所跡地へ移動後、終戦。)の木造の塙の木目に穴を開けて覗いていたことがあるが、ギルモアさんは神戸のどのキャンプにいたか。

② 収容所にいたとき、日本人と交流があったか。

A:(ギルモア氏)

神戸の中心街にあった、東遊園地の近くのキャンプ、我々は神戸ハウスと呼んでいたが、そこにいたが、6月5日の空襲がとてもひどく、その後に脇浜キャンプに移動した。丸山キャンプにはいなかった。

キャンプはイギリス人300名、オーストラリア人150名がいたが、日本人との交流があり、日本人の看守にあだ名をつけていた。一人、ネルソン卿と名づけた看守は親切で、リスクがあるのに我々に座椅子を貸してくれたり、弁当を分けてくれた。

Q2: 帰国後、悪夢を見たことはあるか、今でも見ることもあるか。あるとすれば、それはどのようなものか。

A:(ファウラー氏)

帰国後3年間はひどい状況で、捕虜としての体験に打ちひしがれていた。その時、オーストラリア軍人省の紹介で精神科医のサイコセラピーを受けた。精神療法でいやなことはスイッチしていい方向に考えることを学び、6ヶ月ぐらいかかったが、前向きに考えるすべを身に着けた。大事なものはユーモアで、これがあればこそ明るく前向きに考えられる。

それから、日本人との交流のことだが、ヒントク(註:泰緬鉄道の収容所)にいる時、看守で通称「47」と言われていた人がいた。体調をくずした時、竹を割りそれを並べて歩いていくような過酷な労働条件の作業をしなければならなかったので35~45分ぐらい遅れていったが、彼は温かく見守り、「こっちにこい」と言って、違う作業場へ連れて行き、(他の看守から)「どうしてここへ入ったんだ?」と聞かれてもうまくごまかして3日間ほどそこで守ってくれた。彼のがんばりがあったから、私は命を救われてここにいる。この場を借りて「47」の看守に感謝したい。

Q2:(ファウラー氏とトーマス氏へ)泰緬鉄道ではどこで働いていたか。その時の様子を話してほしい。

また、ウエアリー・ダンロップ軍医についての思い出や接触された経験について聞かせてほしい。

A:(ファウラー氏)

タイからトラックでカンニューというところに連れていかれ、それからまた、ヒントクへ連れて行かれた。ヒントク

には川の近くのヒントク・リバーキャンプと山の方にあるヒントク・アッパーキャンプがあり、私は山の方で切通しを作るという作業に18か月従事した。それから、ターサオという拠点キャンプに移動し、そこで数か月過ごした。それから約50名の仲間と三仏塔峠というビルマ国境のあたりに連れていかれ、約3、4か月トンネルを掘る作業をした。これは日本軍のビルマ作戦に備えて食料を貯蓄するトンネルだった。

ダンロップとは最初から最後まで常に一緒にキャンプで、もう一人マック・カウルという名ドクターがいたが、2人がいたおかげで生き延びることができた。日本軍から捕虜を元気にさせろという命令が出て、より捕虜が元気になるように尽くしてくれた。本当に楽しく過ごした。中には死んだ仲間もあり、この場で追悼の意を込めて話す、彼ら2人がいてこそその命だと思っている。感謝している。

**A2: (トーマス氏)**

最初はジャワのバンドンのあたりで1000人ぐらいの捕虜と一緒にだったが、シンガポールから12日間かけて列車で移動した。その後、カンニューに移動したのが、忘れもしない1943年1月25日のことだった。そこはジャングルの真ただ中でキャンプを作る作業に従事した。数か月前に到着していたイギリス兵捕虜と合流して作った。それからヒントクに行ったが、その様子はファウラーさんが述べたのと同じだ。

**Q4. 先ほどのスピーチの中で「礼儀正しく美しい」と日本を形容してもらったが、戦時中の捕虜に対する日本軍の扱いを顧みて、日本と再び友好関係を築いていけると思うようになったのはいつごろか。また何らかの出来事や出会いがあったか。**

**A: (ギルモア氏)**

今週、日本政府の招聘を受けゲストとしてきたが、来日を承諾した理由は決して不満や文句を言うために来たのではなく、自分自身の目で新しい日本を見てみたい、そして人々と交流し、対話してみたいと思ったからだ。まだ4日目だが、素晴らしいことばかりで日本の文化やライフスタイルからは学ぶことが多いと感じている。そして人の温かさをリアルに感じている。日本文化は見聞きして知っているつもりだったが、実際に体験して素晴らしさを実感している。今まで苦しい経験もあったが、自分の中ではそれはもう終わっており、日本の皆さんの温かさや人柄に感銘を受けている。その気持ちはこれから一生記憶に留めていこうし、是非まわりの人に話していこうと思う。

**A: (ファウラー氏)**

最初はテレビで、それから新聞を通じて、60～70年代に日本という国がすごく変わってきたのを感じた。戦争はあったが次世代の日本人は全く違い、平和を願う人々で、今朝、神社へ行ってきたからかもしれないが、神道の考え方のように穏やかな平和と幸せを願っている人々なんだと感じた。今回招聘されたが、1年前なら無理だったかもしれない。来てみて私はこの国に恋をしたようだ。人々は温かくやさしく、親切で素晴らしい。幼稚園の子どもたちを見ても、日本人ははるかに私たちの先を行っていると感じた。これは人生にとって大いなる喜びで、前の彼も言ったように私も帰ったら周囲の人々に伝えたい。

**Q5: 日本は戦後作られた憲法で戦争を永久に放棄すると定めている。このことをご存じか？ご存知の方は拳手で教えてください。**

**A: (4、5人が拳手)**

**Q6. 平和を創るために若者にできることはなにか。学生に向けたメッセージをいただけるか。**

**A: (ファウラー氏)**

世界は暗いニュースが多いが、スピーチの中で言ったように、怒り・憎しみ・妬みという感情が世界をどんどん悪い方向へ導いているのは残念な状況。戦後ドイツやイギリスなど多くに国が考え方を改めて、スイッチして

きたが、ここでもまた良い方向へ考え方をスイッチしてほしいと願う。例えば難民のように自分の国を追われて住みたくても住めないというのは嘆かわしい状況。国同士がもっともっと対話をして解決の方向へ進んでほしい。そうしないと希望が持てるようにならないと思う。

A:(ギルモア氏)

世の中の憎しみや争いを止めさせるためにも頑張してほしい。

A:(トーマス氏)

今朝訪問した日本の幼稚園では今までの中で最も素晴らしい経験の一つだった。元気溢れる子どもたちを見ると教育の成果だと思う。現在の自分の国を見ると教育が十分でなく、若者の市民意識が違う方向に行ってしまったりと、残念なことが見受けられる。自分の国の子どもも他の国の子どももハッピーに育てて行けるような環境が欲しい。私のメッセージとしてはどの国の国民であっても自国だけでなく世界の市民として成長する人になってほしいと思っている。

## 5. まとめ（共同代表 内海愛子）



ありがとうございました。3分や5分ではPOWの時の体験は話せないだろうと思う。皆さんの飲みこまれた言葉をいかに想像力をもって考えることができるか、これは今度私たちに投げかけられた問題だ。捕虜の36%が死亡するという過酷な体験がどういふものか、これを私たちに考えて行きたいと思う。そして、今日若い世代の人々が参加し、これから捕虜のことを勉強しようとしているメンバーも参加している。資料8頁を見るとヘルファイアパスの写真がある。先ほどから何回も出てくるヒントクはダンロップ軍医のいた所。ここが泰緬鉄道で最大の難所だった。ここを担っていた

のはオーストラリアの兵士、いわゆるダンロップフォース。ヘルファイアパスの写真を見てください。両側は岩山、この岩山を捕虜の人たちがほぼ人力で削り取った。捕虜でもう一人有名なトム・ユーレンは、自分は人間ハンマーとなってこの山に挑んだと言っている。彼は泰緬鉄道の建設が終わるころ、「この小惑星にいる地球上の日本人を皆殺してやりたいと思うほど憎んだ」と書いている。しかし、その彼は皆さんと同様に日本に送られてきて、日本の労働者、朝鮮人労働者や日本の女性達と接する中でこの考えが変わったと言う。彼は「私は日本人を憎むのではなくて軍国主義とファシズムを憎む。そことは戦う。しかし、日本人を憎んではない」ということを書いている。私たちは皆さんの体験を80年代のオーストラリアのラジオ放送で聞くことができたし、「Prisoners of War—Australians under Nippon」、「Survival」、このようなテープがたくさん売られていた。こうした様々な記録を学ぶ中で、捕虜の問題とは何か、これから戦争をしないためにも皆さんの体験をきちんと調査して、若い世代に繋げていく中で、私たちはこれからオーストラリアとどういう関係を創っていくのか、戦争をしない関係をどう創っていくのか、これからも活動していきたいと思う。遠いところどうもありがとうございました。

(記録:高田・小宮・笹本)

---

## 山口県山陽小野田市一広島俘虜収容所第9分所(大浜分所)訪問同行記

2015年11月13日(金) Mr Jack Thomas & Mr Keith Fowler

---

羽田空港 10時20分発 全日空 693便。ジャック・トーマスさんと キース・ファウラーさん、それに同行し



ている通訳ガイドの井出喜代子さんと合流。外務省の小幡ひとみさんは同じフライトが満席で一便前のフライトで先に出発された。私たちのフライトの出発が遅れ、予定より20分遅れて12時25分、山口宇部空港着。10人乗りのバンで市内へ。セントラルホテルで昼食。日帰りで4時間弱の短い同行記だが、現地関係者の周到的準備のお蔭で充実した出会いが多くあった。

## 1. 元子持御前神社場所視察



Ray Parkin 画

てくれた。総務部の下瀬課長さんは早速写真を送って下さり、「本日のこういった草の根の交流が、国際間の相互理解に繋がるのだと認識した次第です」と書き添えてあった。

現在西部石油(昭和シェルグループの精油精製会社)の敷地内にある神社。(子持御前(こもちごぜん)神社は「安産祈願」の神社)で、トーマスさんが来日前にぜひ見たいと言われていたもの。ご本人は実際には見たことはないのだが、捕虜時代の友人 Ray Parkin が自著の中で描いたのがこの神社。70数年前は現在の神社が建っているすぐ前は海岸だったが今はかなり先まで埋め立てられ、西部石油の敷地となっている。小雨の中、トーマスさんもファウラーさんも傘もささずに20段以上もある階段をしっかりと足取りで登り崖の上からの景色に見入っていた。説明

をして下さった西部石油の総務部の担当者に、「こんなにきれいに管理されているのに驚いた。本当に来て実際にその場に立って見ることでとても良かった。ありがとう」と何度もお礼を言った。会社は皆さんが喜んでくれるのでは・・・と当時の日本人が描いた神社の絵(写真ではなく)もわざわざ用意して見せ



## 2. 広島俘虜収容所第9分所(大浜分所)跡地

収容所は現在の宇部フィルム(山陽小野田市に本社を置くプラスチックフィルム製品の製造販売会社)の敷地の一角にあった。鉱員寮を利用した木造2階建てが2棟、事務所、炊事場、豚小屋、ウサギ小屋、野菜畑が西側の道路と反対側の東側にあった。畑に面した東側と北西には空襲時待避所、北側に病院施設と畑があった。

当時の地図を見ながら案内してくれた、山陽小野田市の安重さんの説明にしばし沈黙した後、トーマスさんが記憶をたどった。「事務所に電話が掛かると日本人が走って行き受話器を取って“もしもし”と言ったのをよく覚えている。どうゆう意味かね?」と聞くので「Helloですよ」、と言うと「やっぱりそうだと思った」と言う。地元のテレビ局の取材をうけて、「何か思い出されましたか?」と言う質問に答えて「8月15日の記憶は鮮明だ。普段は日の丸が掲揚されていたが、その日は旗がおろされ周りには誰もいなくなった。沈黙があたりを支配した。そして誰かの声が聞こえた。(小さな声で)私が思うにそれは Emperor の言葉だったのではないか」、と言った(玉音放送の事か?)

さらに、「今年の9月に日本大使館から手紙を受け取った。この招待をととても嬉しく思い快諾した。過去に3回ほどタイ(泰緬鉄道)を訪れたが日本ははじめてだ。私は日本に対して恨みはもっていない。今の日本と日本人に会いたかった。日本に来て予想もしなかった暖かな歓迎を受け、優しい人たちに会えたことはとても嬉しい。70数年前、日本の西海岸、鳥取などを電車で通った時の風景は、こんなに美しい自然がある

所を見たことがないと思った。再びそれらの美しい自然を見に日本に連れてととても嬉しく思う」と答えた。

トーマスさんはこの収容所の跡地に足を運んだことは、今回の今までの日程でのハイライトだった、と語った。当時の図面を見ながら現在は空き地となっている跡地にしばし思いをめぐらしていた。

### 3. 捕虜収容所の近くに住んで、交流をした住民3人との面会

小野田市には大浜と本山の2か所に収容所があった。捕虜たちは主に海底炭鉱での労働に従事した。安重さんの尽力で本山地区に住む住民3人との面会が実現し、そのうちの一人の園田さんの自宅を訪れた。このお宅は近くのお年寄りたちが気軽に立ち寄れるサロンのような場所になっている。2013年に元豪捕虜のチャールズ・エドワーズさんとアディ・ロックリフさんが大浜を訪問した時にも会った方々だが、その後園田さんのお連れ合いやもう一人のお仲間が相次いで亡くなった。安重さんは2009年2月から元捕虜が来訪した時にはいろいろと案内をされており、特に当時を知る地元の皆さんとの交流はとても喜ばれている。だが、元捕虜のみならず年を追うごとに会える人たちが少なくなっていくのも一方の現実である。



藤田さんは当時10歳で、父親は戦前は下駄屋さんだったが、戦争中、炭鉱夫になったので徴用を逃れた。当時はエネルギー供給の花形産業だった石炭産業に従事する者は兵役を免除されたのだ。採掘された石炭は船で運ばれた。当時は木の栈橋だった。話をしている間に、トーマスさんは少しずつ記憶がよみがえったようで、とても興味をもって質問したりした。また藤田さんは捕虜たちとのトラブルは全くなかったとも言われた。

くにた(旧姓)さんは捕虜たちに塀の隙間から卵を差し出すとあめやチョコレート、いい時は缶詰をもらった。「よう、おぼえてるけんねん」とまるで昨日の事のように話してくれた。安重さんが、「くにたさんは当時は5歳で背丈もこんなちいさかった」と紹介すると、すかさずファウラーさんが「あんた、その当時からあんまり大きくなってないんだね・・・」などと冗談を言い、これには皆大笑い。



安重さんが藤田さんの説明をトーマスさんに通訳している間も、くにたさんはビデオ撮影している私に海底炭鉱の事故について、「たくさんの日本人や朝鮮人が爆発事故で亡くなり、今も海底にそのままになってるんじゃないですかねえ」と話してくれ、その話にも興味を持ちながら、同時進行で進むそれぞれの話に左右の耳を最大限に集中して聞き入った。

ファウラーさんは捕虜としては日本には来なかったがトーマスさんたちの話をそれぞれの息子さんたちとともに聞き入っていた。話の最後に園田さん(夫は昨年亡くなった)の趣味である、木目込みで作った猿(2016年の干支)の絵の壁飾りをそれぞれにプレゼントされた。ファウラーさん、絵の中の3匹の猿たちに向かって「いっぱいバナナを食べたんだね・・・」。トーマスさん、「Just beautiful」と二人とも大喜びだった。高齢にも拘わらず訪問してくれた遠来のお客様へのお土産を準備して迎えた地元の人たちの気持ちがこちらにも伝わり、おすそ分けをもらったような気持ちになった。バスに乗る直前に今度はトーマスさんとファウラーさんから3人にオーストラリアの\$50紙幣をそれぞれプレゼントされ、彼らもびっくりして喜びを返した。

この後、皆さんは現在の子持御前神社(1969年移転)がある竜王寺へと向かった。晴れていれば九州の

連山、国東半島が一望できるが、この日は秋雨にかすんでいた。私は途中で失礼して宿泊研修施設「きらら交流館」でバンを降りてタクシーで山口宇部空港に向かった。

一行は翌日新幹線で広島に行き、昼食後、宮島・厳島神社を見て夕方京都に行き、神戸コースと合流の予定だ。せっかく広島まで来たのになぜ「原爆資料館」が予定にないのか疑問に思った。それとも”厳島神社視察”とあるが訪れる特別な理由があったのだろうか。

(記録: 村田則子)

---